

〔国際学術交流プログラム／中国語学・教育 講演会記録〕

中国語教師に欲しい研究者としての素養¹⁾

Essential Research Skills for Chinese Teacher

馬 真

MA Zhen

北京大学

Peking University

E-mail: brtsonvgrus@cass.org.cn

中国語教育学会と愛知大学国際コミュニケーション学会の2団体の招待で、みなさんと交流し、学びあえる機会を設けてくださったことを、非常にうれしく思います。本日おいでくださっている方々のほとんどは中国語教育に従事している教師の方で、中には、今は教師ではないけれど今後中国語教師になれる方もいらっしゃると思います。おいでの方々の中には、日頃中国語を教える中で、学生から出された問題に、自分では即答しにくい場面に出くわすことがよくあると思います。これらの問題は、ふつう既存の文法書や辞典などでは、できあいの解答を探すことができず、大部分が自分自身の思考と研究を通じて解答を得なければならないものです。参加いただいている教師のみなさんはどなたも、このような経験があると思います。これは、わたしたちに努力して自分で思考を重ねる習慣と自立した研究能力を養わなければならないことを教えています。中国語教育に従事するすべての教師にとって、このことはとても重要なことに思えます。

それでは、このような思考を重ねる習慣や自立した研究能力は、どのように段階を踏んで培っていくことができるのでしょうか。今日、私は自己の経験と結びつけて、みなさんにこの問題についてお話したいと思います。

1) 中国語タイトルは《中国語教師应有的素质》

研究能力とは、かつてはふつう問題を分析し、問題を解決する能力を指していました。ですから、わたしたちは、常に「問題を分析し、問題を解決する能力をもたなければならない」と言っていました。このような認識は間違いとは言えませんが、科学的研究という角度から言えば、わたしたちはまず問題を発見する能力を持たなければなりません。「問題を発見する」ことは研究の出発点であり、自分が科学研究の上で成果をあげることでできる出発点でもあります。もしわたしたちが学習や仕事のプロセスの中で、どんな問題も発見できなければ、何を研究すべきかを知ることは不可能ですし、ましてや、どうやって分析、研究すべきかについては論外だということになります。したがって、研究能力には、問題を発見する能力、問題を分析して解決するという3つの方面を含んでいるはずで、その中でも、まずは自分で問題を発見する能力を養わなければなりません。

それではどのようにすれば、自分自身に問題を発見する能力を身につけさせることができるのでしょうか。私は、2つの重要な柱があると思います。一つは、盲従しないこと、盲信しないこと。特に書物に書かれていることがすべて正しいと思っはいけない。二つ目は、自分自身が学び、教えるプロセスの中で、よく考え、意識的に事実と結びつけて、絶えず問題に対して、“为什么—どうして”、“怎么样—どのようか”、“行不行—よいか”、“这样合适吗—これでふさわしいか”などと思索しなければならないのです。盲従しないことと思考を重ねることは1枚の紙の表裏のようなものです。盲従しない人というのはきっと思考を重ねる人であるし、思考を重ねている人は、盲従するという過ちを容易に犯すことはありません。

現在、学問をする上で、謙虚に先人の意見を聞かず、あまり先人の研究成果を受け継がず、先人の研究成果を軽々しく全面否定し、少しもいいところがないと言う人が一部にいますが、これはもちろんあってはならないことです。しかし、もしわたしたちが先人の研究成果に対し、あるいは一部の専門家に対し、ひたすら盲従し、さらには盲信状態にいたってしまうのもあってはならないことです。大事なことは、客観的事物はきわめて複雑で、その上絶えず発展し変化していますから、人類の客観的な世界に対する認識はとどまることがないということです。一人の人は、学問がいくらすぐれていても、その人の研究は当時の全体の研究レベルやその人の研究目的、研究条件など多方面の要素の制限をどうしても受けます。ですから、研究対象に対して、本当に全面的で、完全で、徹底的な認識をもつことは不可能なのです。またその人の研究領域内の問題がすべてその人によって解決されるということもありえませんし、手落ちが少しもないということもありえないのです。したがって、もし先人の研究成果を受け継ぐという基礎の上に、一歩すすめて、新しいものを加えようとするならば、先人の研究成果に対して、わたしたちは謙虚に、真剣に吸収しなければなりませんし、またそれらの不足と問題を発見することに留意することができなくてはならないのです。このような態度をもち、さらに事実と結びつけ、思考を重ね

ることで、問題を発見することができるのです。こうすれば科学研究の道ですばらしい第一歩を踏み出せるのです。

80年代の初めから、私は現代中国語の虚詞の研究に力をいれてやってきました。私の歩んできた虚詞研究の道を振り返ると、まさに問題の発見から始まっています。私が現代中国語の虚詞を研究してはじめて書いた論文は、『中国語文』1982年第4期の「说“也”」でした。私がどのようにして副詞“也”の研究へとひきこまれていったか。『現代漢語虚詞』（景士俊）、『新華詞典』、『現代漢語詞典』及び、その他のいくつかの虚詞辞典では副詞“也”の意味と用法について、多くの説明を並べていました。これらの文法書と辞書の説明の相違に基づいてまとめてみると、副詞“也”は10数種類の意味を表すことができ、「同様を示す」以外に、「並列関係を示す」、「累加関係を示す」、「条件関係を示す」、「逆説関係を示す」、「仮定関係を示す」などがありました。はたして“也”はそんなに多くの文法的意味を表すことができるのでしょうか。“也”は並列の複文、累加の複文、仮定の複文、条件の複文あるいは逆説の複文などの複文の中に現れると、はたして、それぞれ並列や累加、仮定、条件あるいは逆説の文法的意味を表すのでしょうか。私はこれに疑いを持ちました。これが問題の発見でした。

問題発見の後には、事実を調査し、そして一步一步分析を進め、問題を解決しなければなりません。私はまず、複文のなかの“也”について分析を試みました。具体的には以下の2つの複文を対比しました。

(1)他吃了一个苹果，我吃了一个苹果。

(彼はリンゴを一個食べ、私はリンゴを一個食べた。)

(2)他吃了一个苹果，我也吃了一个苹果。

(彼はリンゴを一個食べ、私もリンゴを一個食べた。)

(1)は“也”を使っていない例、(2)は“也”を使った例です。(2)は“也”を使っているで、並列の複文と考えることには異論がないでしょう。(1)は“也”を使っていませんが、みなさんは並列の複文だと思っています。そうすると、“也”が使われている、いないに関わらず、文法学界ではこの二つの複文は並列の複文だと思っているわけです。(1)であれ(2)であれ、いずれも“彼がリンゴを1個食べた”と“私がリンゴを1個食べた”という事を並列して言っているのです。つまり、1つの複文が並列の複文かどうかは、副詞“也”を使っているかどうかで決まるのではないことを説明しているのです。

では、ここでの“也”はいったいどんな役割をはたしているのでしょうか。この(1)、(2)を細かく比較分析してみましょう。この二つの文はいずれも“他吃了一个苹果（彼がリンゴを1個食べた）”と“我吃了一个苹果（私がリンゴを1個食べた）”という二つのことを並列して述べていますが、違いがあることに気がつきます。(2)は“也”を用い、後者“我吃了一个苹果（私が1個のリンゴを食べた）”と前者の“他吃了一个苹果（彼が1個のリン

ゴを食べた)”が同じであることを強調しています。これに対し、(1)は“也”を用いていませんから、“同類であることを強調する”というニュアンスを含んでいないこととなります。この認識のもとに、“也”のあるものと“也”のない、多くの並列の文に対して、一歩すすめて考察と比較をしていきますと、もし並列の複文の前文と後文が言っている意味がまったく同類を表していない、あるいは同類を表していたとしても、強調する必要がないなら、“也”を用いないということが分かりました。例えば、

(3)他是法国人，我是中国人。(彼はフランス人で、私は中国人だ。)

(4) (“你们考了多少分?”) “他考了六十分，我考了六十三分。”

((“試験は何点だった?”) “彼は60点で、私は63点でした。”))

(3)と(4)はいずれも並列の複文です。(3)の“彼はフランス人です”と“私は中国人です”は同類を表していませんから、ここではまったく“也”を用いることはできません。(4)の“彼が60点だった”と“私が63点だった”は同類(二人とも成績が優れていない)を表していますが、この一問一答の中で二つが同類であることを強調する必要はないので、“也”を用いないのです。もし問題にしている2つのことあるいは2つの状況の間に同類の関係があり、さらにこれらの同類関係を強調したいなら、“也”を用いなければなりません。次の例文を見てみましょう。

(5)他是法国人，我也是法国人。(彼はフランス人で、私もフランス人だ。)

(6) (“你们考得好吗?”) “不怎么样，他只考了六十分，我也只考了六十三分。”

((“試験良かった?”) “あんまり良くなくて、彼は60点しかとれなかったし、私も63点しかとれなかった。”))

(4)と(6)の答えを注意してくらべてください。述べている二つの状況は同じです。いずれも“他考了六十分(彼が60点だった)”ということと“我考了六十三分(私が63点だった)”ということです。しかし、(4)のコンテキストは二者が同類であることを強調する必要がないことを決定づけているため、“也”を用いていません。ところが、(6)のコンテキストでは、二者が同類であること、つまり、二人とも試験の結果があまりよくないということを強調する必要があるため、“也”を用いているのです。そうしてみると、並列関係の複文で“也”を用いるか否かの鍵は、同類であるかどうかを強調する必要があるかどうかにあることとなります。並列の複文の考察と分析をしたあと、次にそのほかの多くの“也”を用いたものと“也”を用いていない複文について考察と比較そして分析を行いました。状況はいずれも類似していて、文中の“也”の実際の機能は例外なくすべて同類であることを示しています。並列関係、累加関係、仮定関係、条件関係、逆説関係などといっても、いずれの場合も“也”をもつ複文の文型が表しているのであって、“也”が表しているのではないです。

上で挙げた例は一つのケースです。それはすなわち、各種文法書(や論文)の説明が全

く納得できない内容だということです。次にもう一つのケースについて見てみましょう。これは各種文法書での説明があまり的確でも、完全なものではないものです。まず例文から見てみましょう。

(7) “你喝酒了？” “我并没有喝酒。”

(「あなたはお酒を飲んだ？」 「私は酒など飲んでいない。」)

(8) “咱们给王老师买瓶酒吧。” “王老师又不喝酒。”

(「わたしたちは王先生に1本の酒を買きましょう。」 「王先生は酒を飲まないよ。」)

(7)の中の“并”と(8)の中の“又”は、いずれも否定の語気を強める語気副詞です。一般の辞書、あるいは現代中国語の虚詞に関する書物には、いずれも“并”は否定詞の前に置かれて否定の語気を強めると書かれており、また“又”は否定文あるいは反語文の中に用いられ、否定の語気を強めるとあります。これらの説明が間違っていると言うことはできません。なぜなら、一つ目には、語気副詞の“并”と“又”は確かに否定詞の前にしか用いることができないこと、また、二つ目の理由としては、語気副詞の“并”と“又”は確かに否定の語気を強める役割があるからです。しかし、これらの説明ではあまりに簡単、あまりに大雑把です。読者はこれらの説明によって、どんな場合に“并”を用いるか、どんな場合に“也”を用いるのかを知ることができません。わたしたち中国人からすれば、自分の習慣と語感に任せて用いることができます。先生に聞きに行く必要もありませんし、文法書や辞典などの書物で調べる必要もありません。ですが、外国人留学生にとっては、このような説明は彼らに間違った指導をすることになってしまいます。外国人学生はそもそも中国語の語気副詞の“并”と“也”がいったいどのように用いるのかを知りません。ですから、文法書や辞書にこの二つの語気副詞が否定の語気を強める働きがあると書いてあると、彼らはまず語気副詞としての“并”と“也”の使い方は同じで、つぎに、否定の語気を強めなければならない場合、否定の語の前で“并”あるいは“也”を使えばいいと思いこんでしまいます。その上彼らはしばしば本能的に文法書や辞書での説明に基づいて、類推してこれらを用いるので、その結果、会話や作文の中で以下のような誤用を犯してしまいます。

(9) “你再吃一点儿。” “*我并不能再吃了。”

(「もう少し食べてください。」 「*私はもう食べるできません。」)

(10) “你就向慧玉小姐陪个不是，事情不就解决了吗？”

(「あなたが慧玉さんに謝れば、事は解決するのではないですか。」)

“*我并不向她陪不是！” (「*私は彼女に謝りなどしない！」)

(11) “汪先生卖房子的事，你也知道了？”

(「汪先生が家を売ることを、あなたも知りましたか。」)

“*我又不知道哇。” (「*私は知らないですよ。」)

(12) *你又别收她的钱! (*あなたはまた彼女からお金をとってはいけない!)

(13) *这件事要保密, 你又不能告诉任何人。

(*この事は秘密にして, あなたはまた誰にも教えてはいけない。)

これらの文の中の“并”と“又”はいずれも正しく使われていません。もし否定の語気を強めたいなら, これらの文はいずれも次のように直さなければなりません。

(9)の“并”は“确实”に変えて, “我确实不能再吃了(私は確かにもう食べることができなくなった)”と言うといいでしょう。

(10)の“并”は“就(是)”あるいは“偏”に変えて, “我就不向她陪不是(私は彼女に謝らない。)”というか, あるいは“我偏不向她陪不是(私はなんてったって彼女に謝りません)”というとしっくりきます。

(11)の“又”は, 今度は“并”に変えて, “我并不知道哇(私は知ってなどいません)”と言うべきです。

(12)の“又”は“千万”に変えて, “你千万别收她的钱(あなたはくれぐれも彼女からお金をとってはいけません)”と言う方がよりよいでしょう。

(13)の中の“又”は“决”に変えて, “这件事要保密, 你决不能告诉任何人(この事は秘密にして, あなたは決していかなる人にも教えてはいけない)”とすると比較的しっくりきます。

以上の例は次のようなことを物語っています。まず第一に, どんな場合でも“并”あるいは“又”を用いて否定の語気を強めることができるわけではないということ。そして第二に, “并”と“又”はいずれも否定の語気を強める働きがあるが, 両者にはまた相違があるということです。

以上お話してきたのは, 問題を発見するということについてです。(つまり, 書物の語気副詞の“并”と“又”についての意味と用法の説明が完全ではなく, 適切ではないということについてです。)問題を見つけた後は, そこで提起した問題について, しっかりと研究, 分析を重ね, 解決しなければなりません。つまり, いったいどういった場合に語気副詞“并”を使うべきか, どんな場合に語気副詞“又”を使うべきか, 語気副詞の“并”と“又”の違いはどこにあるかです。語気副詞の“并”と“又”が表す文法的意味や語用の意味背景の違いについては《世界漢語教学》2001年第3期に発表した《表加强否定语气的副词“并”和“又”》で初歩的な検討をしています。私の初歩的な考えは以下のとおりです。

語気副詞“并”の文法的意味は次のようにまとめられる。事実は相手が言っていること、あるいは一般的に考えられていること、あるいは自分で元々考えていたこととは違っていることを強調して説明することで、反駁あるいは本当はこうだったということの説明の意味合いを含んでいる。語気副詞“又”はというと、前提条件を直接否定する文の中に用いて、否定の語気を強める役割を果たすだけである。

もし、どなたか語気副詞の“并”と“又”に興味をお持ちになられたら、その論文をお読みいただいて、批判していただければと思います。ですから、わたしはここでは詳しくは述べないことにします。

以上わたしは自分自身の研究の体験と結びつけ、実際の例を挙げながらお話ししました。自分自身を研究者として育て上げるには、問題を発見し、分析し、解決する能力を養うようにしなければいけません。

どのように科学研究を行うかについて、私はまたいくつかの考えを話し、みなさんの参考に供したいと思います。

一つ目の提言は、教育の現場から問題を見つけ出すことに巧みであるようつとめることです。学習者から出てくる問題の中から研究テーマを見つけ出すのです。上でお話しした語気をあらわす“并”と“又”という研究テーマはまさに留学生の誤用例から生まれたテーマでした。またたとえば私の書いたその他の中国語の虚詞の論文については、以下のものがあります。

「说“反而”」（『中国语文』1983年3期に掲載）

「“比”字句新探」（『アジア・アフリカ语言文化研究』1986年31期に掲載）

「普通话里的程度副词“很，挺，怪，老”」（『汉语学习』1991年2期に掲載）

「“已经”和“曾经”的语法意义」（『语言科学』2003年第1期に掲載）

これらはいずれも留学生の誤用例や学生の質問に触発されて書いたものです。

二つ目の提言は、わたしたちが問題を発見した後に、あるいは他の人がわたしたちに質問をしてきたら、その事柄そのものについて論じてはいけません。つまり、自分で発見した事実あるいは他の人が出した事実そのものについて考えるのではなく、自分の脳裏ですぐに関連する事実を考え、探し、これを基に求める解答を考え出すのです。ここでもみなさんに実際の例をあげて説明したいと思います。次の例文をご覧ください。

- | | | |
|-----|--------|----|
| (4) | 甲 | 乙 |
| | A. 别吃了 | 别吃 |
| | 别去了 | 别去 |

- B. 別掉了 *別掉
 別丟(丢失)了 *別丟

容易にわかると思いますが、Aグループの甲、乙2種類の言い方はいずれも（当然二者は意味の上でも違いがありますが）文として成立することができます。しかし、Bグループの甲は成立しますが、乙は成立しません。これは、Aグループが“了”を伴った形と“了”を伴わない形の両方の言い方ができるのに対して、Bグループはただ“了”を伴った言い方だけがあり、“了”を伴わない言い方を持たないのです。これはどうしてでしょうか。この問題は、あなた自身が見つけたものであれ、他人（例えば、中国語非母語話者）があなたに質問をしてきたものであれ、この問題を解決しようとするときには、上で挙げた四つの例だけをみて、考えたり答えを求めたりしてはいけません。まずは、甲、乙2種類の言い方に基づいてA、Bの2組に分け、自分の頭の中でより多くの用例を探してみるのです。

- (15) 甲 乙
- A. 別写了 別写
 別看了 别看
 別喝了 别喝
 别参观了 别参观
 别讨论了 别讨论

- B. 别噎了 *別噎
 别摔(摔跤)了 *別摔(摔跤)
 别烫了 *別烫
 别忘了 *別忘
 别呛了 *別呛
 别裂了 *別裂
 别皴了 *別皴
 别病了 *別病
 (鸡蛋)别挤破了 *(鸡蛋)别挤破

実例が多くなれば、両者の違いを見つけやすくなります。細かく比較分析を行えば、否定副詞の“別”は具体的には2つの意味を表すことができることに気がつきます。一つの意味は“制止”で、相手にある行為をしないように勧めています。たとえば“你別吃（食

べるな)”, “你別去了 (行ってはいけない)”, もう一つは “聞き手に注意を向けさせ, 起こって欲しくないことが起こることをやめさせるよう注意を向けさせる” という意味で, たとえば “你別掉了 (落とさないようにね)” や “你別丢了 (你別丢失了) (なくしてはだめですよ)” や “鸡蛋別挤破了 (卵をつぶさないでよ)” などです。その中の “掉了” “丢了” “挤破了” など, いずれも発生を望まないことで, “別” を用いることで, 相手にこれらのよくない情況の発生を防止するよう注意しているのです。“別” は第1の意味を表す場合, 後に “了” があってもなくてもよく, “了” を伴うかどうかで意味は当然異なります。“了” を伴えば, 相手がすでにある種類の行為の動作を行っているか, あるいはその行為を行おうと計画中で, 発話者はその行為をやめさせたいと思っています。“你不要吃了 (食べないで)” は, 相手に何かを食べるといふ動作行為をやめさせるよう言っているのです。一方, “了” を伴わない場合は, 通常相手にある種の動作行為を行わないよう促します。二つ目の意味を表す場合, つまり相手に起こって欲しくないことが起こることを止めるように注意を促すときは必ず “了” を伴います。たとえば, “护照你別丢了 (パスポートをなくしてはだめだよ)” を, “*护照你別丢” とは言えませんし, “你別掉了 (落とさないでよ)” を, “*你別掉” ということはできません。“那事你别忘了 (あの事を忘れないで)” を, “*那事你别忘” とは言えませんし, “鸡蛋别挤破了 (卵をつぶさないでよ)” を, “*鸡蛋别挤破” と言うことはできません。このような比較, 分析を通して, わたしたちはいくつかのルールにまとめることができます。「どうして ‘你別吃了 (食べてはだめ)’ や ‘你別吃 (食べてはだめ)’ はいずれも言うことができるのに, ‘你別掉了 (落とさないでよ)’ は言うことができ, ‘*你別掉’ は言えないのか」という質問に対して答えを出すことができるわけです。

もちろん, 問題はここで終わりというわけではありません。例えば, “写错 (書き間違える)” も望まないことが起きてしまった事柄, 状況に属しますが, それではどうしてまた “别写错了 (書き間違えないでよ)” と言えるだけでなく, “别写错 (書き間違えないで)” もいえるのでしょうか。それから, 動詞 “醒 (目が覚める)” はどうして “*别醒了” の言い方がなく, また “*别醒” の言い方もないのでしょうか。

これは動詞の “自主性” (意図性) と “非自主性” (非意図性) および “不本意” であるかどうかという意味特徴とかかわっています。具体的には以下のようになります。

“吃” 类 [+自主]	别吃了	别吃
“噎” 类 [-自主, +不本意]	别噎了	*别噎
“醒” 类 [-自主, -不本意]	*别醒了	*别醒

ここから次のことが見えてきます。もし [+自主性] の動詞ならば, 二つの言い方がどちらもでき, またもし [-自主性] の動詞なら, その動作行為が “不本意” であるかどうか

かを見なくてははいけません。もし“不本意”ならば、“別V了”の言い方だけができて、“別V”の言い方はできません。また、もし“不本意”ではないなら、“別V了”の言い方もないし、また“別V”の言い方もないので。

三つ目の提言です。ある程度考えがまとまったからと言って、それを簡単に肯定しないでください。自分に何度でも「どうなんだろう」「これでよいのか」と問いかけてください。そして、できるだけ実例を見つけてきて検証し、自分の結論がどんな実例に対しても説明が可能かどうかを確かめてください。もし問題があるなら、新しい用例に基づいて、もう文句のつけようがないというくらい何度も修正を加えてください。このように何度も修正を繰り返すのは、まさにより良い論証を得、自分の研究を絶えず深めるためです。ここでも実例を挙げて説明しましょう。

わたしたちは、副詞“还”が多くの文法的意味を表すことができることを知っています。その中には例えば、程度副詞として用い、程度が深いことをあらわす用法があります。例えば“你比他还瘦。(あなたは彼よりやせている)”の“还”は程度が深いことを表す程度副詞です。この“还”は“更”に置き換えが可能で、意味も同じです。皆さんの学校にも外国人がいるでしょう。みなさんの学校の外国人留学生が質問をしてきたとします。「お尋ねします。程度の深いことを表す‘还’と‘更’は意味、用法ともに同じですか」と。私はみなさんがすぐに、この質問に関する次のような用例を思い浮かべてくれると信じています。

(16) 还	更
我比他还瘦	我比他更瘦
小王比小张还高	小王比小张更高
这儿比那儿还脏	这儿比那儿更脏
他比你跑得还快	他比你跑得更快
?我爷爷比我爸爸还严厉	我爷爷比我爸爸更严厉
?白金比黄金还昂贵	白金比黄金更昂贵
.....	

これらの例によって1つの初歩的な結論を得られるでしょう。程度の深いことを示す“还”は、程度副詞“更”と意味も用法も基本的に同じです。それらはいずれも“比”構文(比較構文)に用いることができますが、ただ文体的なニュアンスに違いがあります。“更”は話し言葉に用いることもできるし、また、書き言葉にも用いることができます。しかし、“还”は通常、話し言葉に用いられ、書き言葉には用いられません。“严厉(大変だ、厳しい)”や“昂贵(非常に高価だ)”はいずれも書面語で、したがって、“还”を使うと適当ではないと感じるのです。この結論を得たからと言って、簡単にそうだと決めつけられないでください。さらに、自問自答してください。「この結論でどうだろう」「どんな例

に対しても言えることだろうか」と。自分の結論をできるだけ言語事実に合致させるために、さらに実例を探し、自分の結論で説明不可能なものはないかどうかを確認するので。用例をより多く探してみると、一部の“比”構文では、“还”だけしか使うことができず、決して“更”を使うことができないということに気がつきます。例えば、以下の例、

(17)	还	更
	她的胳膊比火柴棍儿还细	*她的胳膊比火柴棍儿更细
	这儿的蚊子比苍蝇还大	*这儿的蚊子比苍蝇更大
	我过的桥比你走的路还多	*我过的桥比你走的路更多
	那家伙比狐狸还狡猾	*那家伙比狐狸更狡猾
	他们的住宅比宫殿还漂亮	*他们的住宅比宫殿更漂亮
	

どうしてこれらの“比”構文では、“还”しか使うことができず、“更”を使うことができないのでしょうか。比較分析を行うと、これらの“比”構文は、実際には比較を表さずに、誇張の意味合いを帯びた比喩をあらわすことに気がつきます。程度副詞“还”は比較に用いることができ、さらに比喩に用いることもできるのですが、“更”は比較に用いることしかできず、比喩に用いることができないのです。ここまで分析したところで、わたしたちは前の結論を修正しなければなりません。つまりこうなります。

程度の深さを表す“还”と“更”はいずれも“比”構文に用いることができるが、違いもある。その違いの一つ目。“还”は比較に用いることができるし、比喩にも用いることができる。“更”は比較にのみ用いることができ、比喩に用いることはできない。二つ目は、いずれも比較に用いるが、“也”は通常、話し言葉に用い、“更”は話し言葉と書き言葉のいずれにも用いることができる。

この結論はどうでしょう。いいでしょうか。わたしたちはやはりこうして自問自答しなければなりません。もしみなさんが、さらに言語事実を発掘したなら、よりいっその発見があるでしょう。この結論はまだ完全で欠点のないものとはいえませんし、厳密なものとも言えません。ここまで来てまだどんなふうに厳密ではないというのでしょうか。この問題はみなさんが自分でよく考えてみてください。

四つ目の提言です。研究を始めるにあたって、大先輩の学者である呂叔湘先生、朱德熙先生が残してくれた言葉を忘れてはなりません。“从小处着手,从大处着眼(小さなところから着手し,大きな視野から見る)”という言葉です。研究をはじめたばかりの頃は、思索にふけり、イメージーションをふくらますことに熱心なものです。特に若い人は。これはいいことです。新たな道を切り開く一つ的前提でもありますから。しかし、とりわけ

科学研究をやるには、“求实（事実を重んじる）”精神をもっていなければなりません。いわゆる“求实”とは以下の三つのことを含んでいます。一つ目は、研究テーマは具体的なものでなければならず、大雑把で役に立たないものはいけないということ。かならず現実の必要性つまり、現実的な必要性和発展の必要性に合致していて、実際の問題を解決するものでなくてはなりません。二つ目。論は事実を根拠とし、妄想だらけの空論ではいけないということ。三つ目は、自分の力にあわせ、自分の力で論をすすめられるテーマを選ばなければならないということです。この三つをやり遂げるには、研究をし始めた頃は、“从小处着手,从大处着眼（小さなところから着手し、大きな視野から見る）”が一番いい方法なのです。言い換えれば、研究テーマは、より小さく、より具体的なものでなければならないということです。しかし、研究プロセスにおいて、意識的に一定の理論のレベルにまで引き上げ、思索し、問題を分析しなければならないし、またその中から法則を見つけ、まとめることに巧みでなくてはなりません。

時間になりました。私の話は以上です。みなさんのご意見、ご批判を歓迎いたします。ご清聴ありがとうございました。

訳／中西千香 校閲／荒川清秀

2005年6月19日(日) 第35回国際学術交流プログラム・

第1回中国語学・教育 講演会

於 愛知大学車道校舎本館9階 K902教室